

第2回春期ホームカミングデーを開催しました

平成30年5月3日、ホームカミングデーが開催され、修了生・現役院生・教員合わせて50名が参加しました。4年目を迎えた教職大学院では、既に1・2期生が修了生として各地の学校や行政の現場で仕事をしています。大学院での2年間の学びがどのように現場で活かされているのかについて、修了生と院生・教員が教育について語り合う場が「ホームカミングデー」です。前半は全体会形式で3月に修了したばかりの2期生の近況報告、後半は8班に分かれてのラウンドテーブルで活発な発表・協議が行われました。いずれの発表者も、2年間の教職大学院での実践的な学びが現場での仕事に有益に役立っていると、確信に満ちた発表をされました。今回は、ホームカミングデー参加者の声の一部を紹介します。

◆ 修了生の声

○現職修了生A氏(学力向上推進リーダー)

日々校務に追われる先生方が、授業改善に取り組む意識を高めるための校内研修のあり方や、学力向上推進リーダーとしての先生方との関わり方について、大学教員や院生と話し合うことでこれまでの活動を見つめ直すことができました。何より、真摯に教育と向き合う仲間と徐々に再会し、私自身が先生方や子どもたちから学ぶ意識をもって、また明日から頑張ろうという気持ちになりました。



○現職修了生B氏(中学校教諭)

学年主任という立場で、OJTも視野に入れ、積極的に授業を公開しています。学年内での道徳のローテーション授業、他学年への出前授業、全職員参加の道徳の授業研究会実施など、実習校で行ってきた経験を活かしていく予定です。学年においては、生徒と担任とともに、あたたかく、居心地の良い学年を目指しています。生徒一人一人に応じた指導や支援を第一に考え、日々の教育活動を行っていきたくと考えています。

○現職修了生C氏(小学校教諭)

小規模校から大規模校へ異動しました。学年ブロック単位で動く学校組織、学級担任の3分の1を占める教職5年目以下の若手教員。単純な人数・規模の違いだけではなく、教職員構成についてのリアルな課題を客観的に捉えることができるのは教職大学院において学んだからです。一緒に修了した学卒院生と同校配置となったことも大きな意味を持つものであり、若手教員育成の研究について今後も継続して取り組んでいきたいと思えます。

○学卒修了生D氏(中学校教諭)

教職大学院で学んだからこそ、個に着目して授業を行っています。授業への意欲が低い生徒に対し、一方的に叱るのではなく、生徒が何に対して困っているのかを考

えるようになりました。困り感を解消した生徒はとてもしきいきと学んでいます。授業への意欲(態度)と学習内容への意欲は同じではないと気付けたのは教職大学院での成果の1つです。生徒の学びたいという気持ちを引き出せるよう、今後も個に応じた授業を行っていきます。

○現職修了生E氏(指導主事)

「学校改革力」「授業力」「個への対応力」に関連する様々な理論を学び、当たり前だと考えていた学校現場での実践や自己の教育観を批判的に振り返ることができています。在籍校でない学校で様々な取組を実践したり他県の学校現場に足を運んで見聞を広めたりしたことで、多様な学校改善の方策や学校課題に対する対応策を理解することができたので、それらを教職員研修等の機会に活用することができています。

◆ 院生の声

○現職派遣3期生F氏(教職大学院2年)

今年度、1回目のホームカミングデーが開催され、我々3期生が準備や運営を担当しました。ラウンドテーブルでは、修了生から、授業における「深い学び」とは何かということや今後の学校の在り方などについて大変示唆に富んだ話題を提供していただき、実りの多い充実した時間を過ごすことができました。また、教職大学院修了後も、理論と実践の往還を続け、学びを深めている先輩方の姿を目の当たりにし、大変刺激を受けました。今回のホームカミングも楽しみにしております。



◆ 大学院の学びと修了後の学びの関連

今回のホームカミングデーでは、修了生が実践した成功事例だけでなく、現場で悩みながらも前進していることを共有しました。教職大学院の学びが、各地の教育現場での学びにつながり、さらに広まっていけるよう修了生たちのネットワークの深まりに期待します。

(文責:原田浩司)

「オープンエンドアプローチ」 教育実践高度化専攻教授 日野圭子

算数・数学は、「答えが1つだから、はっきりしていて楽しい。」と聞くことがあります。その一方で、「答えは1つ」に縛られると、その答えに、あるいは、そこに早くたどり着くための手続きばかりに注意が集まってしまう。オープンエンドアプローチは、この考えを転換するものです。

「 $15 \div 3$ は？」と聞けば、答えは5となります。これはクローズドな(閉じられた)問題です。一方、「答えが5になる割り算の式は？」と聞けば、答えは1つには決まりません。 $15 \div 3$ 、 $30 \div 6$ 、 $5 \div 1$ などがすべて正解となるオープンエンドな問題となります。正解は1つではないので、自分のペースで新しい正解を見いだすことができます。また、たくさん見つかった式を順序良くならべると、 $5 \div 1 = 5$ 、 $10 \div 2 = 5$ 、 $15 \div 3 = 5$ 、 $20 \div 4 = 5$ 、…となり、パターンが見えてきます。例えば、 $\square \div \triangle$ の \square と \triangle に同じ数をかけても、同じ数で割っても、答えは変わりません。そうしたさまりの発見もできます。

このように、オープンエンドアプローチは、「正答がいく通りにも可能になるように条件づけた問題」を用いて、「そこにある正答の多様性を積極的に利用して授業を展開し、その過程で、既習の知識・技能・考え方をいろいろに組み合わせる新しいことを発見していく経験を与えようとするやり方」(島田茂編著、『新訂算数・数学科のオープンエンドアプローチ』東洋館、1995)を意味しています。

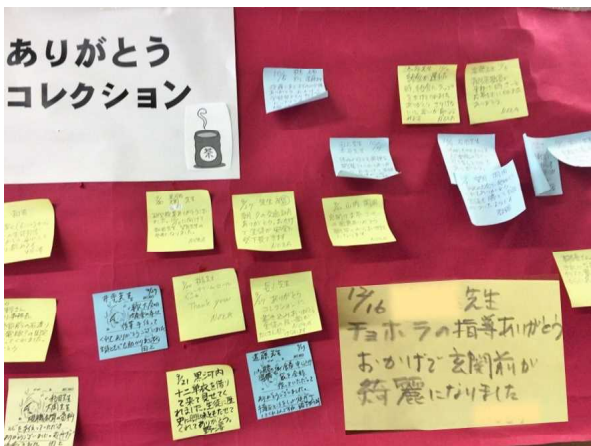
このアプローチは、柔軟性・多様性・創造性などの思考力の評価と育成を目指す中で生まれました。現在、新学習指導要領をはじめとして、知識基盤社会に求められる資質・能力がクローズアップされています。その中には、主体性、多様性、協働性といった態度や思考が含まれています。こうした力は、教科を横断して育成が求められていますが、各教科が蓄積してきた試みの中に、それらを育成するパワーを持ったものがいくつも存在しています。それらを今、新しい視点で捉え直すことが必要とされています。

《シリーズ:院生の声 ②》

ありがとうを伝え合う習慣

「印刷室の蛍光灯を交換してくれてありがとう」
「資料の綴じ込みを手伝ってくれてありがとう」
「給食が遅れた時、ラップをかけてくれてありがとう」
職員室の給湯スペースの壁に設けられた掲示スペースには、いつもたくさんのありがとうが貼られている。これは、実習でお世話になっている真岡市立久下田中学校のことである。現在、私は「同僚性」についての研究を行っている。実習校の雰囲気よさ、先生方の良好な人間関係はどのように構築されているのかを教育活動に加わらせていただきながら学ばせていただいている。その特徴的な取組がこの「ありがとうコレクション」である。やり方はとても簡単。気付いた人が気付いたときに、付箋にメッセージを書き、台紙に張り付けるだけである。職員は、通りがかりに掲示されたメッセージを見る。当事者だけでなく、他の職員も温かい空気を共有することができる素晴らしい取組だと思う。次の実習の時にはどんな付箋が貼られているかと考えるだけでも、ワクワクする今日この頃である。

(2年 井寺 聡)



省察を通して新たな問いへ

教職大学院生にとっての学びの場は多様です。自身の研究テーマとの関連した知見や幅広い視野を獲得するために、多くの院生が学内の授業だけでなく県内外で開催されている研修等に積極的に参加しています。

今回は4月27日(金)に栃木県総合教育センターで行われた、次世代型教育センターによる「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」についての講話に参加させていただきました。講話では、主体的・対話的で深い学びが求められるようになった背景やそれらに向けた授業改善とはどのようなものを目指していくべきなのか等、具体的なイメージや実践を交えてとても分かりやすくお話いただきました。

特に一番印象に残ったのは、主体的な学びへとつながるための「振り返り」の大切さです。去年実施した長期インターンシップでは、子どもたちの「やってみよう」「考えてみよう」という思いを引き出すための工夫として、教材選びや課題設定などにしか目を向けることができていませんでした。しかし今回の講話を聞いて、子どもたちが授業の初期段階と比べて終末段階における考えの高まりを自覚できる、つまり自分なりに学んだ手ごたえを確認できる「振り返り」をしっかりと行うことも子どもたちの「もっと知りたい」「もっと学びたい」という主体的な学びへとつながる重要な過程であることに気づかされました。また、講師の先生の言葉を借りて言うならば、「教師は、子どもの思考が導入で終わる打ち上げ花火型でなく、終末まで続く末広がりの授業を心がけていかないといけない」のだと改めて実感しました。

アクティブ・ラーニングという言葉は知っていても、具体的にどのような取り組みなのか、子どもたちのどのような姿なのか、まずは教師自身が深く理解することから始まるのだと思います。1年目の課題を振り返りながら2年目の研究テーマへとつながる学びができたとても貴重な時間でした。

(2年 土山桃佳)

